

パヴェーゼを読んだ夏

—そして、ブザンソンでの仲間たち

木方元治

「あのころはいつもお祭りだった。家を出て通りを横切れば、もう夢中になれたし、何もかも美しく、とくに夜にはそうだったから、死ぬほど疲れて帰ってきてはまだ何か起こらないかしら、火事にでもならないかしら、家に赤ん坊でも生まれないかしらと願っていた、あるいはいつそのこといきなり夜が明けて人々がみな通りに出てくればよいのに、そしてそのまま歩き歩きつづけて牧場まで、丘の向こうまで、行ければよいのに。」

チエーザレ・パヴェーゼ『美しい夏』（河島英昭訳）

一九七九年、僕はフランス東部の街ブザンソンでひと夏をすごしました。

この物語は、その時出会った忘れえぬ友人たち、そしてイタリアの作家パヴェーゼについての物語です。

I

マラ、ボリス・ビアン

「僕は、スノップ。これが僕がもっている唯一つの欠点」

ボリス・ビアンは、この歌の一節で始まります。

マラとの出会いはこの歌で始まりました。

マラは、ユーゴスラビアのベオグラードから来た大学生。

そのころのユーゴスラビアは、まだチトーが支配する美しく平和な国。社会主義国の一角だったけれど、そのなかでは最も西側に近く、マラ達の考え方も西側の僕たちとほとんど一緒。フランスでおそらくは最も美しい月である六月を心の底から楽しんで日々を送っていました。

「ねえ、マラーねえ……」

僕のこんな呼びかけにマラは決まって答えます。

「何回言ったらわかるの。私はマラよ。マラーじゃないんだってば。」

僕はマラと呼びきるにはちょっと抵抗があるその日本人ならではの理由を説明することもできず、マラはその大きな目で僕をにらみつける。その表情がフランスの夏を表しているようで、その夏が永遠に終わらないで欲しい。そんな気持ちになりました。

「僕はスノップ、僕はスノップ

これが僕がしょい込んだたった一つの欠点

これには何か月ものヤバイ仕事と辛い生活が必要

Hildegard^{*}と一緒に外出するとき、

いつも注目されるのはボク

僕はスノップ、ヒドクスノップ、

ボクの友達はみんなスノップ、これがいいんだ」

(*) Hildegard : 一九三〇年代に活躍したアメリカのキャバレー歌手

一九五四年にボリス・ビアンが作った歌。ボリス・ビアンは一九二〇年パリ郊外生まれの小説家、詩人でジャズトランペッター。そのアメリカ的な華麗な生き方は一九五〇年代のパリジャンに大きな影響を与えました。五〇年代を疾風のごとく駆け抜け、一九五九年その短かった三十九年の生涯をパリで閉じました。

マラにこの歌を説明すると信じられないような顔つきで、「この歌のどこがいいのよ！ こんな退廃した歌が。」と返してきます。

「君は西側の良さがわかってないね。」

西側に理解を持った国ユーゴスラビアから来たマラにはこの言葉が耐えられなくて、

「何言ってるのよ！ あんたにはユーゴスラビアの良さなん

民、いわゆるポートピールの一人。フランスも九万六千人のベトナムからのポートピールを受け入れました。まだ十五歳のソンも生まれて初めて踏む土地フランスに馴染もうとしていました。

でもお父さん、お母さんも失い、祖国を失ったソン。国を失うとはどういうことか、日本人の僕にとってちょっと縁遠いことを初めて教えてくれたのはソンでした。

フランスといえば文化の国ということくらいしか思い起こさなかった僕にとって、それとは違うフランス、難民を受け入れ彼らに生活の場を与える国としてのフランスを初めて考えさせてくれたのもソンでした。

寡黙でほとんど自分から話かけることもなかったソンは夏が終わった後、勉強を続けるために違う街へ移りました。

それきりになってしまったけれど、君はフランス人として幸せに生きているのかしらん。あるいは、ベトナムを復興させて偉い人になっているのかしらん。

四十年たった今、思いは尽きません。

III

ホセ、チリ

「サンチャゴに雨が降る。」

一九七五年に公開されたこの映画によってチリのピノチェッ

かちつともわかってないんだから！」

僕たちの夏は三か月であっさり終わりました。

彼女が帰っていったユーゴスラビアはそのころは僕にとつてまだ謎の国。

でも、彼女の語ったベオグラードの夏は美しく、優しさに満ちた夏でした。

それから四十年、ユーゴスラビアはすでになく、僕はそんなベオグラードの夏を経験せずじまい。あの動乱の中、マラはどうなったのか。

マラはユーゴスラビアに帰る間に僕にこう言いました。

「あなたがボリス・ビアンみたいにならないでまっとうな人生を送ることを祈ってるわ。」

そう僕も今、祈ってます。

「マラ、君がユーゴスラビアの戦火を乗り越えて幸せな人生を送っていることを。」

II

ソン、ベトナム

ソン。ベトナムから流れ着いた十代の若者。ベトナムでは比較的裕福な家庭に育ちお父さん、お母さんはサイゴンで料理店を経営していました。

一九七五年のサイゴン陥落で、世界中に散ったベトナム難

ト軍事政権による一九七三年のクーデターは世界史にその名前をとどめることになりました。

ホセはその時、チリの名門サンチャゴ大学で化学を専攻し、将来を嘱望された科学者。

このクーデターが彼の生涯をかえました。

一九七〇年チリでは社会主義政権アジェンデ政権が誕生。

これに対し、南米の左翼化を恐れたアメリカはピノチェット將軍を使い、一九七三年クーデターを起こさせる。軍事政権ピノチェット政権の誕生です。これに抗して多くの市民が立ち上がりました。チリの生んだ世界的な詩人、パブロ・ネルーダもこの戦いの中、命を失いました。ホセも立ち上がった市民の一人。大学内のバリケードに立てこもってホセは戦いました。

彼はその戦いの多くは語りませんでした、その後彼はピノチェット政権に捉えられ、愛する祖国チリを追われ、国連難民としてフランスに流れ着いたのです。

僕には彼が僕に語ったことよりも語らなかつたことにより心を打たれました。

ある時、彼が僕に無言で差し出したのは国連難民パスポート。

祖国を失った悲しみはそのパスポートにすべて語られていました。

その後、目覚ましい経済発展を遂げたチリ。でもホセの居

場所は決してそこにはありませんでした。

IV

ジェラルドとガブリエル、ベネズエラ

ジェラルドもガブリエルもベネズエラの陸軍大学を卒業したエリート軍人。

その態度は自信に満ち溢れ、国に選ばれてフランスに留学してきた、そんな誇りがその行動の節々を支配していました。一九七〇年代のベネズエラはオイルショック後の石油価格高騰により財政は潤い、中南米で最も豊かな国。一九七三年に就任したベレス大統領下で経済は繁栄を極め、欧米からも注目を受けていた国でした。一方でベレス大統領下で財政も緩み、一部富裕層のみがその繁栄を享受、一九七九年にはすでにその弊害も明らかになり、民衆の不満も高まっていた時期。

でも軍のエリートたちにはたつぷり給与も支払われ、ジェラルドもガブリエルもその他の中南米から来た留学生と違い、余裕のある留学生生活を堪能、中南米から来た女性たちを脇に従えフランスの夏を楽しんでいました。ベネズエラがどんなに素晴らしい国か、彼らは僕にその国歌を教えてくださいるとともに二十世紀が中南米復権の世紀になるという信念を語り聞かせてくれました。

口もきけず。

アリーナさんは何事もなかったように午後の授業にいそいそと出かける。

その年、イランは大きな変革の真ただ中にありました。

一九七九年一月イランを支配していたシャーは、パリに亡命中のホメイニが指導する反体制運動の高まりにエジプトに亡命。二月ホメイニは亡命先のパリからイランに十五年ぶりに帰国。同月十五日「イスラム共和国」の樹立を問う国民投票の結果、国民の九十八%の賛同を得る。この結果を受けて四月一日ホメイニは「イスラム共和国」を宣言。

フランスにも多くのイラン人が流れ込み、シャー派と新政府派の殴り合いの戦いはその街角で日常の出来事として続いていました。

この大変革期の中、アリーナさんは祖国イランの今については沈黙を続け、誇り高いペルシャ文化と自分が関わりたい今のフランス文化について黙々と勉強を続けていました。

アリーナさんと、街角で殴り合っているイラン人たちはどうしても僕の頭の中で結びつけることができず、僕にとってアリーナさんはいつもペルシャの王女様でした。

今でも、僕にとってイランはアリーナ王女を生み出した気高い国です。

でもその後のベネズエラがどうなったか。それを思うとあの夏がつかの間のベネズエラの輝きだったのかと今思います。

V

アリーナ、ペルシャの王女様

アリーナ。僕たちにとってペルシャから来た王女様。彼女はシャー体制のイランから来た誇り高いペルシャの淑女。

お父さんはテヘラン大学の医学部教授というエリート家庭。彼女自身はパリでデザインの勉強をするために来て、夏の間僕たちと一緒にフランスの田舎生活を楽しんでいました。

彼女の家でご馳走になるペルシャ料理はそれまで味わったことのないような素敵な料理。いつしか、アリーナは僕たちの仲間でペルシャの王女様として扱われるようになりました。

ある時、僕はイエメンから来た国費留学生に呼ばれ、アリーナと付き合いたいんだけど紹介してくれないかとのリクエスト。なんせ彼は中近東の田舎イエメンから来た貧乏学生、「それはムリダロー」と言いたい気持ちを抑えて、アリーナには「今度、アラビア半島から来た仲間たちとカフェにでも行こう」とやんわりお願いする。

さすがはペルシャの王女様。「いいわよ」

でも当日イエメンの学生はアリーナに会った途端、緊張で

VI

ポール、シリアの秀才

ポール、シリアのダマスカスから来た政府留学生。物理学を勉強していて僕が今までに出会った人たちの中でも最も頭が良い人間の一人。いつも冷静でシリアの国をどうしていくか、理路整然と話してくれました。決して政治的にならず、シリアをきちんとした国にどう立て直していくか。日本から来た僕には考えられないくらいの真剣さで考えていました。国を愛するとはどういうことか、ポールはその夏に僕に教えてくれました。

今、内戦状態にあるシリアで彼は何をやっているのだろうか？

既に交流が途絶えて四十年。この四十年はお互いにとっても長くて、何が起こっても（特にシリアという国にあっては）おかしくない四十年だけれども、今でも彼の冷静沈着な目つきと語り方はくつきりと出てきます。

シリアの現実を前に僕たちができることは？
今でもポールに問いかけている僕がいます。

サム、 Wisconsin のアメリカ人

サム。アメリカの Wisconsin から来た交換留学生。

サムは僕の会った学生たちの中で最も内気で自信を無くした学生でした。

「僕にはどうしてもフランスが馴染めない。早く僕の街に帰りたい。」

会うたびに弱音を吐いていたサム。フランス人の誰一人友達を作ることなく、一緒に来たアメリカ人とだけ話していたサム。そのころのアメリカはベトナム戦争の後遺症に苦しみ、国民が自信を失っていた時期。

サムは従軍経験もなく、政治的な話も一切することはありませんでしたが、アメリカ人が自信を失っていることは、彼の話のしばしばから感じ取ることができました。

アメリカに帰る時のサムの一言が今でも思い出されます。

「結局、フランスは僕にとって縁遠い国だった。僕にとって生きる場所は僕の生まれた街しかない。」

世界の中心にある大国アメリカは一方で世界から孤立した辺境の国。アメリカの歴史で繰り返しやってくる孤立主義の波、今のアメリカを見るにつけ僕はサムの言葉を思い出します。

フレデリックとシヨパン

フレデリックはシヨパンを命の次に愛した二十歳の少女。

フランスでユダヤ系の人を見るのは珍しいことではありませんが、フレデリックもその一人。

第二次世界大戦ではフランスにいた三十三万人のユダヤ人のうち約八万人が強制収容所に連行されたと言います。フランスでもユダヤ人のアイデンティティー問題は深く傷を残し、フランス社会に同化していく人が多く存在する一方、ユダヤ人のアイデンティティー問題は常にフランスの根底に存在し続けてきました。フレデリックはそんなユダヤ人問題を語ることはありません。常にシヨパンへの愛を語るのです。でも、ふと感じる時があるのです。シヨパンの曲は美しい。でもシヨパンを生み出したヨーロッパという社会には何かとても深く到達できないものがある。

フレデリックはそんな複雑な女の子でもあったのです。

マリアとキリスト様

マリア。彼女はアテネから来た経済省の役人。ご主人を早

アランとポール

く亡くし、女手一つで男の子を育てています。この夏は経済省から派遣されてフランスに経済研修へ。

ギリシヤは戦後、対共産主義の重要拠点としてアメリカの介入を受け左派・右派の入り乱れる政治混乱が続き、一九六〇年代以降は軍政が支配していました。一九七四年カラマンリスが亡命先のフランスから帰国、民主政権が誕生しましたが、脆弱さは否めず、国際社会からも不安視される政治体制でした。

マリアは忠実な国家官僚、政治的な話は一切口に出しませんでしたが、僕は彼女を通じて初めてギリシヤ正教を知ることになりました。

ギリシヤ正教ではマリア様は、生神女マリア様。

「救いたまえ。マリア様」

僕たちのマリアもみんなを救ってくれる素敵な生神女マリア様。

ベトナムから来たソンのことをいつも思い、僕たち頼りない若者をじっと見守ってくれました。

そんなマリアが一番喜んだのは、後年、彼女の一人息子が結婚式をあげた時。

マリア様の子供が美しい妻を娶り、幸せな家庭の第一歩を歩み始めた時、僕たちすべてのマリアの子供たちはとても幸せな気持ちになり限らない祝福を送ったのです。

パヴェーゼ、夏

そんな、仲間たちと過ごした一九七九年の夏。

パヴェーゼの夏はさらに続きます。

「あなたたちは元氣だから、若いから」と人には言われた、「まだ結婚していないから、苦労がないから、むりもないわ」でも娘たちのひとりのびっこになって病院から出てきて家にはるくに食べ物もなかったあのテイーナ、彼女でさえわけもなく笑った、そしてある晩などは、小走りにみなのおとをついてきたのが、急に立ち止まって泣き出してしまった。だつて眠るのはつまらないし楽しい時間を奪われてしまうから。

チエーザレ・パヴェーゼは一九〇八年北イタリアのトリノの近くの小さな村サント・ステファアノ・ベルボに生まれたイタリアの作家。彼の青年時代の一九二〇年代はイタリアでファシズムが台頭した時期に重なります。政治に一定の距離を保とうとはしつつも次第に反ファシズムの運動に巻き込まれていきました。一九三五年には雑誌「Cultura (文化)」の編集長となりましたが、トリノの知識人大量検挙に巻き込まれ逮捕、八月には南イタリアの僻村ブランカレオーネに流刑の身となり、一九三六年三月に流刑がとかれるまでその地に幽閉の身となりました。

「美しい夏」が執筆されたのは一九四〇年、パヴェーゼ三十一歳の年でした。すでにイタリアは第二次世界大戦に突入、パヴェーゼはひたすら沈黙を保ち、執筆に集中しました。

今までの自分が憧れるとともに恐れていた大人の空間を隔てる厚いカーテンです。

ジーニアはその日常空間であるアトリエであえて裸になることを選びます。

自分の目の前でアメリカ人がモデルとしてガイドに裸を晒しているのに嫉妬を起こし。今まで憧れつつも恐れていた行為、自分の裸を晒すことをガイドのみならずアメリカ人にも行ってしまうのです。

この時、あつてはならないことが起こります。カーテンを隔てた寝室にはガイドの友人ロドリゲスが寝ていました。目をさましたロドリゲスはジーニアの裸を目撃してしまふのです。

ジーニアにとって何か起こるのではないかと期待しつつ何も起こらないそんな居心地の良かった美しい夏が終焉を迎える決定的瞬間です。

ジーニアはこの事件以来、仲間とのコンタクトを断ち、自殺も考えるようになります。

そんなある日、ジーニアはアメリカ人の訪問を受けます。みんなから見放されたと思ひ込んでいるジーニアにとっては信じられない訪問です。アメリカ人はそこでロドリゲスがとても大きなショックをうけたこと、ガイドがロドリゲスに嫉妬を感じていること、アメリカ人がジーニアのことを好きかどうか盛んに気にしていること（この小説はアメリカ人と

発表はその十年後の一九四九年。発表と同時に大反響を呼び一九五〇年にはイタリア文学界の最高の賞であるストレーガ賞を受賞することになります。

「美しい夏 (La bella estate)」は、十六歳の少女ジーニアが三歳年上の女性アメリカ人の導きで大人になっていく物語。アメリカ人の紹介でジーニアは、彼女の兄と同年代の画家ガイドに出会い、ガイドと男と女の関係を結ぶ。憧れと怖れ、嫉妬の間で激しく揺れ動くジーニアの心。アメリカ人を知り、ガイドを知ったジーニアが見る世界は同じものを見ても違った世界になりました。

「家を出て通りを横切れば、もう夢中になれたし、何もかも美し」かった夏はどんな遠いものになっていくのです。

しかしながら、この物語では、アメリカ人が梅毒と診断されることを除けばジーニアの身辺に事件らしい事件はなにもおこらず、すべては平凡で退屈な日常的時間の中で過ぎていきます。美しい夏を永遠に失わせるような大事件は何一つ起こらないのです。

元々この小説は「カーテン (La Tenda)」という題名がつけられる予定でした。

ガイドのアパートの寝室とアトリエを兼ねたリビングを仕切る赤いカーテン。それはジーニアにとっては、それまで過ごしてきた何か起こりそうで何もおこらない日常空間と、

ジーニアの二人の恋愛小説とも読めるのです）、そして自分の梅毒の治癒の目処がたったことを話すとともにジーニアに映画にいかないと誘います。

この小説でジーニアの最後の言葉は象徴的です。

「あなたの好きなところに行きましょう、あたしをつれてつて。」 (Andiamo dove voi, conducimi tu)

一九七九年の夏もそんな夏だったかも知れません。

そこで集まった仲間は思い思いの期待を抱きつつ、何か起こりそうで何も起こらない日常の時間を楽しんでいた。

そしてその夏は、仲間たちが皆こう言うことで終わりを告げたのかもしれない。

「あなたの好きなところに行きましょう。あたしをつれてつて。」

今でもその夏を思い出します。

初めて読んだパヴェーゼの夏とともに。

その時以来、パヴェーゼは、僕の日常に寄り添って生きてくれました。

平凡で退屈な夏を何回も繰り返す僕に。

パヴェーゼその人は一九五〇年夏のトリノでその四十二年の短い生涯を自ら閉じたのだけれども。